PISA IN FOCUS 19

education policy education policy education policy education policy education policy education policy education policy

教育に「セカンドチャンス」のようなものは本当にあるのだろうか?

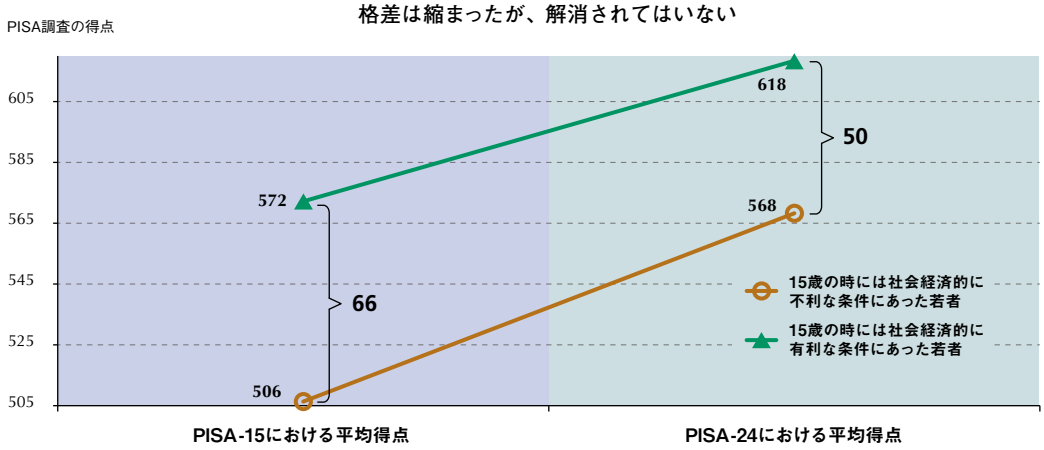
- カナダの15歳児の読解力から、24歳になった時の読解力をかなり正確に予測することができるが、若年成人は義務教育終了後でも自分の読解スキルを伸ばすことができる。
- ほとんどの場合、読解力は青年期への移行中に向上するが、中には他の集団より大きく伸びる集団がある。特に移民は、15歳から24歳にかけて能力差を埋めることができる。
- 何らかの形でフォーマルな中等後教育を受けることは、15歳と24歳の間の読解スキルの向上に確実かつ大いに関連している。

少年期から成人初期へと移行する15～24歳の期間は、若者の社会的及び知的発達には非常に重要な時間である。義務教育が終了した時点で少年は、今後の学習や雇用の見通し、さらには満足な暮らし全般に大きな影響を及ぼす、中等後教育、就職、またはその他の人生の選択について重大な決断をしなければならない。読解スキルにしっかりした基礎があれば、専門的な高等教育や仕事のための教育を修了するのがずっと楽になる。反対に、若者が15歳以上になっても読解スキルを必要としなかったり、使おうとしなかったりした場合、この能力が失われ始めることもある。

教育や訓練の機会が容易に与えられる場合、初期教育が不十分でも残りの人生で読解力が不足する、と運命づけられるわけではない。

10年間にわたってカナダで行われた研究では、15歳児を対象にしたPISA 2000年調査(PISA-15)で収集したデータを、同じ生徒と保護者に対する全国調査(若者の学校から労働への移行調査)として2年ごとに行われた追跡調査の結果と組み合わせた。2009年には、2000年に15歳でPISA調査を受けた同じ生徒を再調査し(PISA-24)、人生の中の極めて重要なこの期間に若者はスキルを獲得したり失ったりするのか、またどのように獲得し、失うのかを調べた。調査に参加した若者は、15歳～24歳の間に読解力得点で平均57点増えたが、これは学校教育の1年分を超える得点差に相当する。さらに、中程度に複雑な読解力問題をこなすことができるレベルで、高等教育に入学できる可能性が非常に高い習熟度レベル3を超える得点を取った若者の割合は、15 歳の79%から24歳の93%へと増加した。

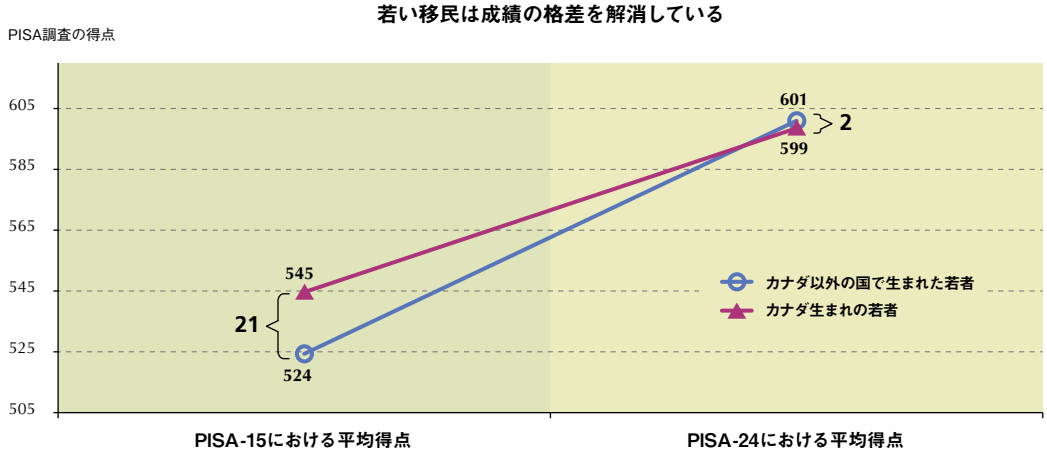
時を経て、有利な条件にある若者と不利な条件にある若者との間の格差は縮まったが、解消されてはいない



出典: OECD (2012), *Learning beyond Fifteen: Ten Years after PISA*, OECD Publishing, Table 3.2.

15歳の時に成績が悪かった生徒が、この間、最も向上したとはいえ、その大部分は同学年の生徒に完全に追いつくことはできなかった。例えば、PISA調査に参加した生徒が15歳だった2000年、読解力では女子が男子を平均32点上回ったが、2009年までにその隔たりは18点に狭まった。同様に、PISA2000年調査で社会経済的に恵まれていた生徒は、恵まれていなかった同学年の生徒を65点を超えて上回っていたが、2009年までにその隔たりは50点に狭まった。しかし、15歳の時は不利な条件に置かれていたと見なされた生徒の24歳時の平均得点（PISA-24で568点）は、恵まれた条件の15歳の生徒の平均得点（PISA-15で572点）より低いままである。

若い移民は成績の格差を解消している



出典: OECD (2012), *Learning beyond Fifteen: Ten Years after PISA*, OECD Publishing, Table 3.2.

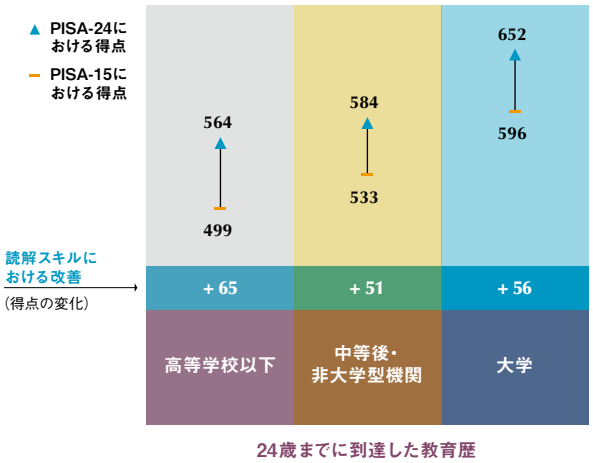
ある生徒集団にはその隔たりがまったくなくなった。それはカナダ以外の国で生まれた生徒たちだった。15歳のとき、カナダ生まれの生徒の成績は外国生まれの生徒よりも20点以上上回り、それぞれ545点と524点だった。24歳になると、移民の背景を持つ若者はカナダで生まれた人と同等の得点で、平均約600点であった。この意義深い発見は、カナダの教育及び統合を目指した政策の有効性を反映したものとなっている。

読解力の向上は教育の実現と強く結びついている…

読解力の向上に最も影響を与えるのは何か?何らかの形でフォーマルな中等後教育を受けることは、15〜24歳の間の読解力向上に、確実かつ大いに結びついている。24歳の大学卒業者は、PISA再調査の平均得点が652点だった。対して、高校しか出ていない生徒は平均で100点近く低い564点だった。前者の集団の生徒が15歳の時、彼らはPISA2000年調査で平均596点を取っており、最終学歴が高校である生徒が9年後に取った得点よりかなり高い。

24歳までに中等後教育の学位を取得することもまた、15歳時に獲得した技能レベル、社会経済的背景、そしてその他個々の特性を考慮に入れたとしても、スキルの向上と強い関係がある。PISAの再調査では、高校しか卒業していない、または3年以上の就業経験がある24歳の成績は、さらに上の教育を受けた人や実質的な就業経験がもっと少ない人よりも平均して得点が低い。

誰もが読解スキルを改善することができる



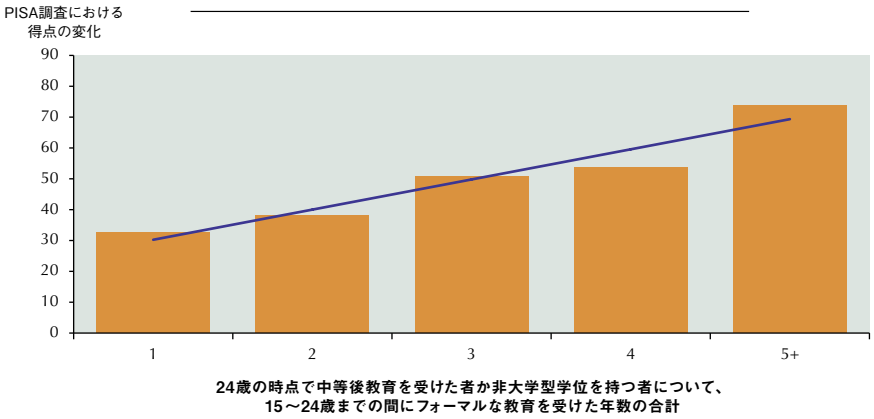
出典: OECD (2012), *Learning beyond Fifteen: Ten Years after PISA*, OECD Publishing, Table 6.1.

…そしてフォーマルな教育や訓練を受けることとも深い関係がある。

成績の悪かった人が当初の不利な状況を完全に覆すことはできそうにないが、この研究はそういった不利な状況を乗り越えるいくつかの方法を見つけ出した。個々人がたどる教育進路に関係なく、読解力の向上は教育システム内で過ごす時間と強い関係がある。例えば、15歳以降に4年以上学校に通った若年成人の読解力は、24歳までに実際に学位を取得したかどうかにかかわらずほぼ同じように向上している。高校では教育課程を修了できなくても、高校卒業後に4年以上勉強した生徒は読解力が70点向上した。大学の学位をきちんと取得した生徒は、読解力が60点向上した。

若年時に高い能力を持つとその先の教育で有利になり、成績の悪い者には簡単にはアクセスできそうにない、上級の教育を受ける機会が生まれる。中等教育を終えてから直接大学レベルの教育へ進むという最も一般的な進路を進むと読解力が最大限に向上すると思われるが、誰もがこの進路をたどるわけではない。このユニークな研究は、機会さえあれば成績の悪い生徒でもその多くが、義務教育後の何年間かの間に読解力を向上させる方法を見つけられることを証明している。誰もが成績優秀者に追いつくとは限らないが、獲得したスキルは、後に彼らがさらに深く社会参加するための助けになる。

読解力はフォーマルな教育とともに向上する



出典: OECD (2012), *Learning beyond Fifteen: Ten Years after PISA*, OECD Publishing, Table 6.2.

結論: 学ぶことは義務教育で終わりではない。学歴に関係なく、若者は15～24歳の間に読解力を向上し続けられるという事実が、初期教育での成績の悪さを理由に読解力が劣っていても仕方ないと思うべきではないことを示している。セカンドチャンスを与える制度と教育システムの柔軟性が、人生の初期段階に勉強しやすい環境の恩恵を受けられなかった若者を救うことができる。

本稿に関するお問い合わせ先
担当: Pablo Zoido *(Pablo.Zoido@oecd.org)*

出典: OECD (2012), *Learning beyond Fifteen: Ten Years after PISA*, OECD Publishing.

参考サイト:
www.pisa.oecd.org
www.oecd.org/pisa/infocus

次回テーマ:
「学校バウチャーは教育の平等につながる? 」

本稿の翻訳は、日本のPISAナショナルセンターが担当しました。